

# 公民科「現代社会」の学習への興味をより高めるための授業の工夫

—聴覚障害や聴覚障害者を題材とした実践から—

雁丸 新一

本研究では、公民科の授業の目標の1つである、社会的事象に興味や関心をもち、より深い理解を得るための取り組みとして、A 特別支援学校（聴覚障害）高等部の生徒を対象とし、「現代社会」において、聴覚障害や聴覚障害者に関する内容の授業を実施した。特に、「現代社会の諸課題」分野では震災時の聴覚障害者の体験、「政治」分野では聴覚障害者の人権、「経済」分野では高齢の聴覚障害者に関する内容を取り上げた。授業に出席した生徒への質問紙調査の結果を基に、本授業による生徒の学びや課題について検討した。

キー・ワード：公民科 現代社会 聴覚障害 聴覚障害者 授業実践

## 1 はじめに

選挙年齢の引き下げを踏まえ、新学習指導要領では高等学校公民科において「公共」が新設され、公民科が果たす役割は今後さらに大きくなっていくことが推察される。

しかしながら、公民科については、教科の特性上、抽象的な概念や事柄が多いこと（山本・藤木, 2017）、また、大学進学を考えている生徒の中には、公民科の科目を必要としない生徒も少なくないことなどにより、授業に対する生徒の興味や関心の個人差は大きいのが現状である。

このようなことから、公民科の授業において、生徒の学習への興味や関心をより高めるための取り組みとして、聴覚障害に関連する内容を取り上げた授業を実施した。

## 2 目的

本研究では、A 特別支援学校（聴覚障害）（以下、A 校）高等部の生徒を対象とし、聴覚障害や聴覚障害者に着目した公民科「現代社会」の授業を行い、授業に関する生徒への質問紙調査の結果を基に、本授業による生徒の学びや課題について検討する。

これにより、公民科の題材である、社会的事象への興味や関心を高め、理解を深めるための教材研究に役立つ知見が得られると考えられる。

## 3 方法

### (1) 授業の概要

A 校高等部では、公民科「現代社会」（2 単位）は3年次の必修科目として設定されている。「現代社会」は、「現代社会の諸課題（以下、諸課題）」、「倫理」、「政治」、「経済」、「国際」の5分野により構成されている。聴覚障害や聴覚障害者に関する内容については、2018年度は「諸課題」と「経済」分野で、2019年度は「政治」分野において扱った。

「現代社会」の授業のまとめにおいて、「諸課題」分野では、東日本大震災の被災地に在住する聴覚障害者を対象とした、震災時の状況や行動などを中心とした約30分間のインタビュー映像を基に、被災地の状況や震災時の聴覚障害による影響、心構えなどについて理解を深めるための学習を行った。

「政治」分野では「基本的人権の保障」のまとめとして、ろうあ運動や手話通訳者の必要性が求められる契機となった昭和40年の「蛇の目寿司事件」の経緯、及びその社会的影響について紹介した。また、当時の聴覚障害者や手話に対する偏見や社会的背景などについての理解を深めるために、無実の罪に問われる青年ろう者が主人公となっている小説「四つの終止符」（西村, 1964）を紹介した。この小説は映画化されており、被告であるろう青年に対する取り調べの場面から、弁護士による刑法第40条の適用についての説明の場面までの約15分間の映像を提

示し、当時の聴覚障害者や手話を取り巻く社会的状況などの理解を深めるための学習を行った。

「経済」分野では、「社会保障のまとめ」として、医療機関での説明は専門用語や抽象的な語が多く用いられるので、高齢の聴覚障害者には理解が困難であること、また、住居に関しては高齢や聴覚障害であることにより入居を拒否される場合があること、情報取得の面では、機器の操作や読み書き困難などの問題に直面していることなど (Fig. 1)、高齢の聴覚障害者の現状について学習した。

## (2) 授業出席生徒

本研究では、同一教師が担当している「現代社会」の授業に出席していた 2018 年度の 19 名、及び 2019 年度の 17 名を対象とした。

## (3) 調査方法

授業に出席した生徒全員を対象とし、多肢選択式及び自由記述式による質問紙調査を 2018 年度については年度当初及び年度末、2019 年度は年度当初及び 1 学期末に実施した。

質問紙調査用紙は当該授業の終了後に配付し、10 分程度の記入時間の後に回収した。

## (4) 調査項目

公民科の授業に対する興味や関心とその理由、また、2018 年度の年度末と 2019 年度の 1 学期末の質問紙調査においては、授業の中で興味があった内容についての回答を求めた。

# 4 結果

## (1) 回収率

2018 年度当初の質問紙調査については、授業に出席した生徒 19 名全員が回答したが、年度末の授業では 2 名欠席で、回収率は 89.5%であった。

また、2019 年度の年度当初及び 1 学期末の質問紙調査では、授業に出席した生徒 17 名全員が回答した。

## (2) 質問紙調査の結果

### ① 2018 年度の質問紙調査の結果

「公民科の授業に興味や関心はありますか。」という質問について、①ある、②どちらかと言えばある、

③どちらかと言えない、④ない、の 4 件法により回答を求めた。

年度当初では①と回答した生徒が 4 名、②が 11 名、③が 4 名であり、年度末では①が 7 名、②が 8 名、③が 2 名であった (Fig. 2)。

また、その理由について、自由記述による回答を求めた結果、年度当初において①及び②を回答した生徒では「時事問題について理解することができるから」と「社会 (の仕組み) を理解することができるから」と回答した生徒がそれぞれ 5 名と多く、「一般常識 (必要な知識) だから」が 2 名、「楽しいから」、「法律に興味があるから」、「担当の先生による」がそれぞれ 1 名であった。③及び④を回答した生徒では、「内容 (用語) が難しいから」が 2 名、「暗記が多い」と「興味がない」がそれぞれ 1 名であった。一方、年度末の調査において①及び②を回答した生徒の理由は「(授業が) 面白かったから」が 4 名と最も多く、「時事問題について理解することができたから」、「社会 (政治や経済) について理解することができたから」、「一般常識だから」がそれぞれ 3 名、「広い視点をもつことができたから」、「余談も参考になったから」がそれぞれ 1 名であった。③及び④を回答した生徒の理由は「用語が難しいから」と「苦手だから」がそれぞれ 1 名であった。

また、年度末調査における自由記述では、授業で特に興味があった内容に関する 59 の記述がみられた。そのうち、「経済 (の仕組み)」と回答した生徒が 14 名と最も多く、「憲法」が 8 名、「時事問題」が

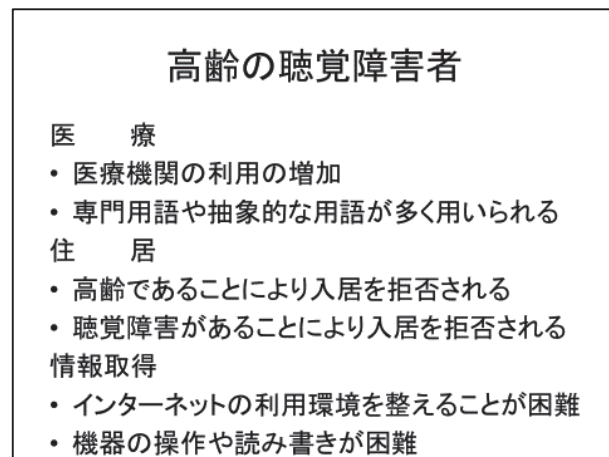


Fig. 1 授業で用いたスライドの一部

7名、「選挙」、「政治」、「税金」がそれぞれ5名、「資本（社会）主義」が4名、「社会保障」、「高齢の聴覚障害者」、「権利」がそれぞれ3名、「諸課題」と「統治行為論」がそれぞれ1名であった。

② 2019年度の質問紙調査の調査結果

「公民科の授業に興味や関心はありますか。」という質問について、年度当初では①と回答した生徒が4名、②が8名、③が2名、④が3名であり、年度末では①が8名、②が5名、③が1名、④が3名であった (Fig. 3)。

また、その理由について、年度当初において①及び②を回答した生徒では、「時事問題について理解することができるから」が5名と最も多く、「社会（政治や経済）（の仕組み）を理解することができるから」が4名、「楽しいから」が2名、「必要な知識だから」が1名であった。③及び④を回答した生徒では、「苦手だから」が3名、「興味がない」が2名であった。一方、1学期末の調査において①及び②を回答した生徒では、「時事問題について理解することができたから」、「社会（政治）（の仕組み）を理解することができたから」、「憲法（法律）について理解することができたから」、「（授業が）面白かったから」と回答した生徒がそれぞれ3名、「一般常識だから」が1名であった。③及び④を回答した生徒では「興味がない」が2名、「内容（用語）が難しいから」と「苦手だから」がそれぞれ1名であった。

また、授業の中で興味があった内容については60記述がみられ、そのうち「権利（人権）」が13名と最も多く、「裁判（員）（宇奈月温泉事件を含む）」が

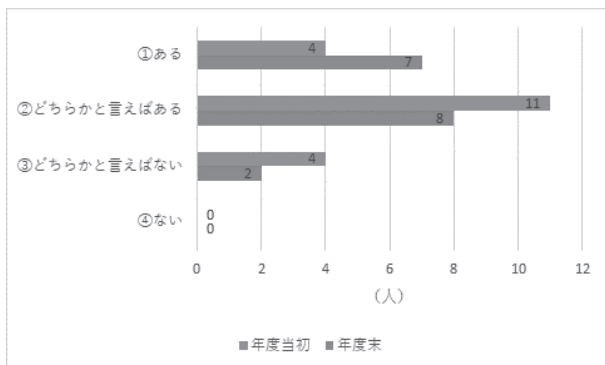


Fig. 2 2018年度の公民科の授業に対する生徒の興味や関心

11名、「憲法（と法律）」、「蛇の目寿司事件（「四つの終止符」を含む）」がそれぞれ8名、「政治」と「自衛隊」がそれぞれ5名、「労働」が4名、「諸課題（科学の発展）」と「余談」がそれぞれ2名、「皇室」と「モンテスキュー」がそれぞれ1名であった。

5 考察

質問紙調査の結果から、2018年度では「公民科の授業に興味や関心はありますか。」という質問に対して、①及び②と回答した生徒は年度当初、及び年度末ともに15名であったが、①を回答した生徒は年度当初の4名から年度末には7名に増加し、③及び④を回答した生徒については年度当初の4名から、年度末には2名に減少していた。また、2019年度では、①及び②を回答した生徒は年度当初が12名、1学期末では13名とほぼ同じであったが、①を回答した生徒は年度当初の4名から、1学期末では8名に増加し、③及び④を回答した生徒は年度当初は5名、1学期末は4名とほぼ同じであった。

これらの結果から、2018年度と2019年度ともに、①を回答している生徒の割合は増加しているものの、①・②（興味がある）、及び③・④（興味がない）を回答した生徒数から見ると、公民科の授業に対する興味や関心は、基本的な興味をもっている生徒にはその効果が現れ易いようだが、全体的には大きな変化はみられないようであった。今後は、公民科の授業に対して興味がないと思われる生徒の興味や関心を高めるための教材研究が必要であると考えられる。

また、その理由について、年度当初と年度末また

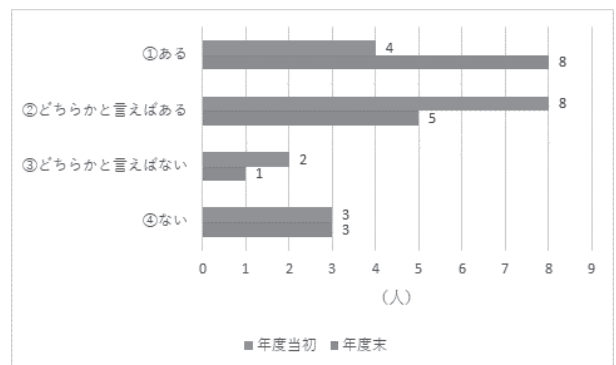


Fig. 3 2019年度の公民科の授業に対する生徒の興味や関心

は1学期末の調査結果を総合すると、「時事問題について理解することができる(できた)から」が最も多く、生徒の時事問題に対する興味や関心の高さが窺える。このことから、公民科の授業に対する生徒の興味や関心を高めるためには、時期を捉え、また必要に応じて、時事問題を生徒の興味や関心に合わせて扱うことが、重要な要素の1つであることが推察される。

さらに、興味を持った内容については、2018年度では「経済(の仕組み)」と回答した生徒が14名、2019年度では「権利(人権)」が13名と最も多かった。これらは、「現代社会」を構成する各分野の中心的内容であり、生徒が公民科の重要な内容について理解を深めていることが推察される。しかし、これらのことについては、生徒がそれぞれの内容を学習した時期と、質問紙調査の実施時期とが比較的近かったことによる影響が含まれる可能性も考えられる。すなわち、「経済」分野の学習は年度後半に行われ、質問紙調査の実施が年度末であったこと、また、「権利(人権)」の学習は年度前半に行われ、調査の実施が1学期末であったことによる影響の可能性も推定される。

一方、聴覚障害や聴覚障害者に関する話題については、2018年度では「高齢の聴覚障害者」に興味をもったとする生徒が3名(17.6%)、2019年度では「蛇の目寿司事件(「四つの終止符」を含む)」が8名(47.1%)であった。このことから、公民科における基本的な内容に比べて、聴覚障害や聴覚障害者に関する内容が生徒の興味や関心を惹きつけていたことも推測される。

また、「震災時の聴覚障害者の体験」に関する記述はみられなかった。これについては、この学習内容のみを対象とした質問紙調査を本研究の調査とは別に実施していたことが、その一因と推測される。この題材を取り上げた授業については、授業に出席した生徒28名のうち、24名が新しい知識や考え方を①得ることができた、②どちらかと言えば得ることができた、と回答していた(雁丸・橋本, 2016)。このことから、「震災時の聴覚障害者の体験」といった

内容も、生徒にとって興味や関心をもちやすいものであると推察される。

本研究では、公民科の授業で聴覚障害や聴覚障害者を題材として取り上げることによって、公民科の学習内容である、さまざまな社会的事象への興味や関心を高めることを試みた。

一方、聴覚障害や聴覚障害者に関する話題は多様で多岐にわたっている。また、授業での生徒の発言の様子から、「震災時の聴覚障害者の体験」、「高齢の聴覚障害者」、「蛇の目寿司事件(「四つの終止符」を含む)」の内容は、生徒によって、そこから受ける印象の度合いがそれぞれ異なることも窺われた。

したがって、どのような聴覚障害や聴覚障害者に関する話題をどのように取り上げるのか、また、それぞれの生徒による捉え方の多様性も視野に入れながら授業研究を重ねていくことが、今後の課題であろう。

#### 〔謝辞〕

本研究で対象とした授業において、インタビュー調査にご協力頂きました聴覚障害者の方、また「四つの終止符」の映像の使用をご承諾頂きました関係者の方々に、感謝申し上げます。インタビューと映像の使用については、承認を得て使用させて頂きました。

#### 〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

#### 〔参考文献〕

- 雁丸新一・橋本時浩(2016) 聴覚障害生徒を対象とした東日本大震災から学ぶ授業の実践報告. 聴覚障害, 71(766), 54-59.
- 西村京太郎(1964) 四つの終止符. 講談社.
- 山本和弘・藤木大介(2017) 高校生の公民科現代社会における学習動機が公民的態度の獲得に与える影響. 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 66, 107-115.